

浅川扇状地遺跡群

M I W A S I T E

三輪遺跡 (5)

(仮称) 滝澤マンション建設工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

小島柳原遺跡群

K A M I N A K A J I M A S I T E

上中島遺跡

東邦北長池団地造成工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3

長野市教育委員会

序

善光寺平は、東縁に上信越国立公園山系より延びる火山性の東部山地、西縁を海底等の隆起による堆積性の犀川丘陵山地に囲まれ、南北に長く盆地が形成されています。そして盆地内部においても、千曲川によりもたらされた沖積地、それに注ぎ込む大小の河川による扇状地が発達しております。このような複雑多岐にわたる地形の上に現在の長野市が成り立っています。そこにはそれぞれの地形や立地に応じて様々な生活や生産活動がみられ、古代から営々と続いてきた人々の英知の集合を垣間見ることができます。

本書に所収しております三輪遺跡は、飯綱山を水源とする浅川が形成した扇状地上に立地する浅川扇状地遺跡群に属し、また上中島遺跡は千曲川左岸に形成された自然堤防上に展開する小島柳原遺跡群に属しております。それぞれ広大な面積を有する遺跡群であり、縄文時代から現代まで脈々と続く、長野市を代表する集落域であります。ここにお届けいたします長野市の埋蔵文化財第62集には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。連綿と綴られてきた人々の歴史の中のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役にいただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査実施に際して多大なご尽力をいただきました株式会社滝澤建設・東邦商事株式会社の関係各位と地元の方々、本書刊行に至るまで適切なお援助・ご指導を賜りました関係機関諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成6年3月

長野市教育委員会
教育長 滝沢忠男

例 言

- 1 本書は、民間開発事業「(仮称)滝澤マンション建設工事」および「東邦北長池団地造成工事」に伴い、平成5年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者 滝澤芳一 および委託者 東邦商事株式会社 代表取締役 増子司平 と受託者 長野市長 塚田 佐 との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市三輪3丁目750-1番地および長野県長野市大字北長池字上中島1652番地であり、それぞれの実質調査面積は280㎡および240㎡である。
- 4 本書の作成は飯島が担当した。整理作業は各調査員が分担しこれを補助した。
- 5 発掘調査の実施に際し、事業委託者である滝澤芳一氏および東邦商事株式会社代表取締役増子司平氏においては埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、絶大なご協力を賜った。また現場における調査においては下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。
三輪遺跡 株式会社滝澤建設・上野昭一、内山 威
上中島遺跡 東邦商事株式会社・若林一巳・野口譲三、北信土建株式会社・野沢 敏
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。
なお、出土遺物の注記記号は三輪遺跡「AMTM」、上中島遺跡「KNJT」と表記してある。

凡 例

- 1 本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。
- 2 実測図等に掲載した方位は全て座標北、また地図等に記載した方位は真北を表している。なお、磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。
- 3 遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、(有)写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。現場にて1:20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1:80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 4 検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号を基に、仮に下記のとおり作成した。
SA…竪穴住居跡、SD…溝跡・河川跡、SE…井戸跡、SK…土坑、SM…墓跡、SP…小穴、
SX…性格不明遺構、Tr…トレンチ、
- 5 遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図1:4、土製品・石製品・金属製品実測図と土器拓影等1:3に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 6 土器の実測図において、土器の種類や黒色処理・赤色塗彩等は網掛けによって下記のとおり表記した。



……弥生土器・土師器



……赤色塗彩・須恵器



……灰釉陶器



……その他陶磁器



……黒色処理

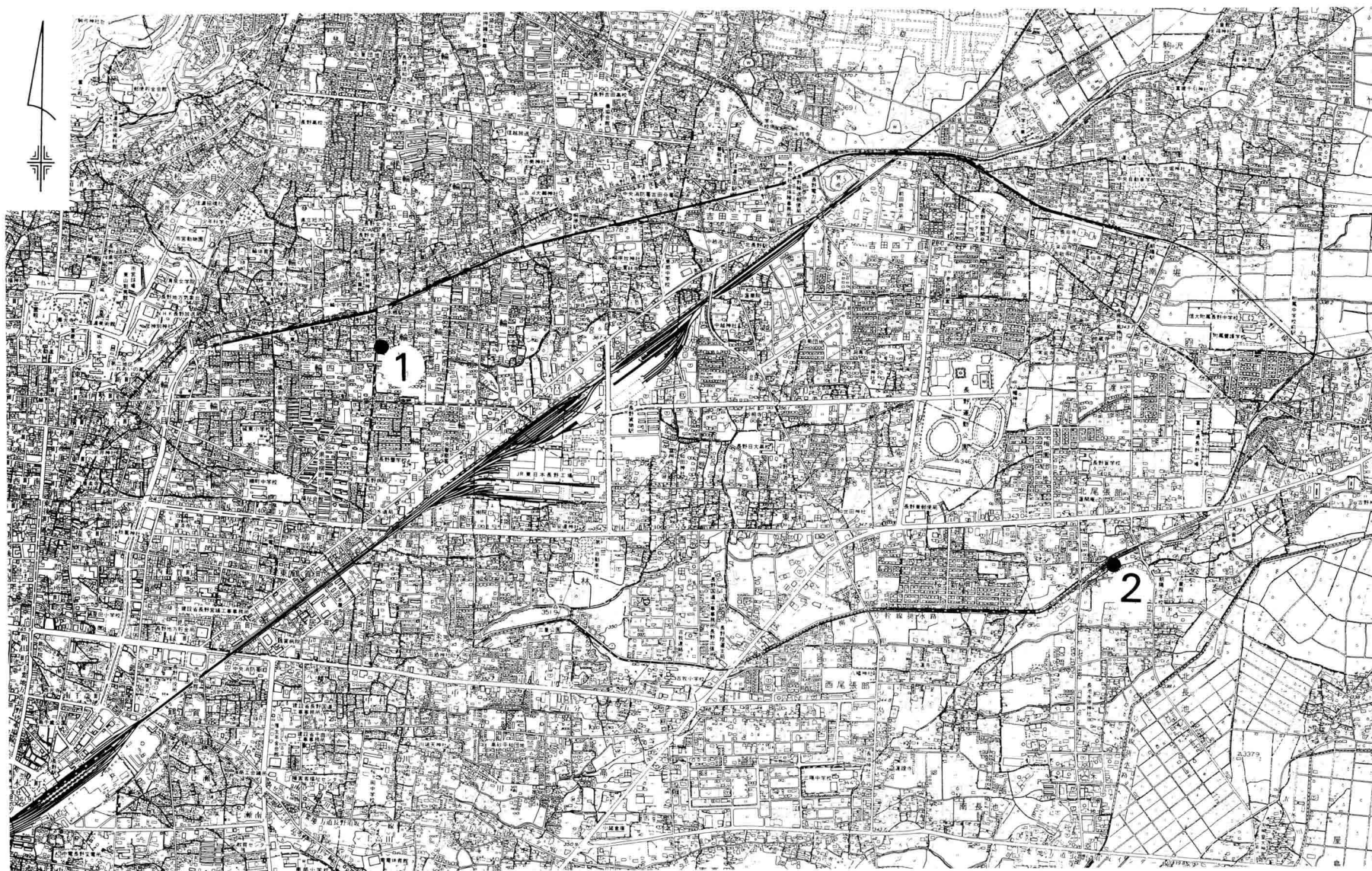


図1 調査地位置図 (S = 1 : 25,000)
(1…三輪遺跡(5)、2…上中島遺跡)

目 次

序 文
例言・凡例
調査地位置図
目 次

浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)

第I章 調査経過	3
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査日誌抄	4
第3節 調査体制	5
第II章 調査成果	6
第1節 調査区の位置と地形	6
第2節 発掘調査歴	6
第3節 基本層序	8
第4節 遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 河川跡	12
第III章 小 結	13

小島柳原遺跡群 上中島遺跡

第I章 調査経過	17
第1節 調査に至る経過	17
第2節 調査日誌抄	18
第3節 調査体制	19
第II章 調査成果	20
第1節 調査区の位置と地形	20
第2節 発掘調査歴	20
第3節 遺構と遺物	22
(1) 竪穴住居跡	25
(2) 火葬骨埋葬墓	29
(3) その他の遺構	29
第III章 小 結	30

報告書抄録
奥 付

挿 図 目 次

浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)

図 1	調査地位置図	
図 2	三輪遺跡調査地地点位置図	6
図 3	調査区位置図	7
図 4	土層柱状模式図	8
図 5	三輪遺跡(5)全測図	9・10
図 6	S A 1 実測図	11
図 7	S A 1 出土遺物実測図	12
図 8	S D 1 出土遺物実測図	12

小島柳原遺跡群 上川島遺跡

図 9	上中島遺跡調査地点位置図	20
図 10	調査地周辺地形図	21
図 11	調査地周辺字図	21
図 12	調査区位置図	22
図 13	上中島遺跡全側図	23・24
図 14	S A 1 実測図	25
図 15	S A 1 出土遺物実測図	26
図 16	S A 2 実測図	27
図 17	S A 2 出土土器実測図	27
図 18	S A 3 出土遺物実測図	28
図 19	S A 3 実測図	28
図 20	S M 1 実測図	29
図 21	検出面出土遺物実測図	29

写 真 目 次

浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)

写真 1	A 区重機表土剥ぎ作業	4
写真 2	A 区河川跡検出作業	4
写真 3	A 区河川跡掘下げ	4
写真 4	B 区土層断面実測	4
写真 5	発掘調査参加者	5
写真 6	S A 1 全景(東から)	11
写真 7	S A 1 全景(南から)	12
写真 8	S A 1 土器(2)出土状況	12
写真 9	B 区全景(西から)	13
写真 10	A 区全景(南から)	14
写真 11	A 区全景(西から)	14

小島柳原遺跡群 上川島遺跡

写真 12	重機による表土剥ぎ作業	18
写真 13	検出作業開始	18
写真 14	S A 1 掘り下げ	18
写真 15	S A 3 掘り下げ	18
写真 16	発掘調査参加者	19
写真 17	S A 1 全景	25
写真 18	S A 1 カマド近景	26
写真 19	S A 1 出土遺物写真	26
写真 20	S A 2 全景	26
写真 21	S A 2 カマド近景	27
写真 22	S A 3 出土遺物写真	28
写真 23	S A 3 全景	28
写真 24	S M 1 検出状況	29
写真 25	S M 1 半掘状況	29
写真 26	検出面出土遺物写真	29
写真 27	S A 1 ~ 3 検出状況	30
写真 28	全景(西から)	31
写真 29	全景(東から)	31
写真 30	全景(南から)	31
写真 31	全景(北から)	31

浅川扇状地遺跡群

M I W A S I T E

三輪遺跡 (5)

(仮称) 滝澤マンション建設工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3

長野市教育委員会

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経過

三輪遺跡の所在する長野市三輪一帯は閑静な住宅街である。長野電鉄沿線であり、また複数のバス路線が交錯する市内交通の要所であるところから、近年ではマンションや事業所が林立し、住宅街からその姿をかえようとしている。こうした中、都市計画法第32条の規定に基づく開発行為にともなう事前協議申出書が事業者である滝澤芳一から提出された。当該地籍においては周知の埋蔵文化財包蔵地である浅川扇状地遺跡群の範囲内に属し、また過去当教育委員会においても4回の発掘調査を実施している地域でもあるため、埋蔵文化財保護措置の必要性を判断し、事業者との保護協議を実施した。以下書類に記された日付に従い事務経過を列挙する。

平成5年1月28日受付（埋文センターあて、建築指導課より合議）

「開発行為にともなう事前協議申出書」

1月30日付4埋第216号（建築指導課長あて、埋文センター所長名）

「開発行為に関する事前協議について（回答）」

2月5日付（市教育長あて、滝澤芳一名）

「開発行為にともなう埋蔵文化財確認調査の依頼について」

2月9日 埋蔵文化財確認調査の実施。

2月12日付4埋第234号（滝澤芳一・建築指導課長あて、埋文センター所長名）

「三輪3丁目共同住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財確認調査について（報告）」

3月3日付4埋第248号（建築指導課長あて、埋文センター所長名）

「開発行為に関する埋蔵文化財保護協議結果について（報告）」

3月5日付（文化庁長官あて、滝澤芳一名）

「埋蔵文化財発掘の届出について」

3月10日付4埋第253号（県教育長あて、埋文センター所長名）

「埋蔵文化財発掘の届出について（進達）」

3月5日付4埋第254号（文化庁長官あて、市教育長名）

「埋蔵文化財発掘調査の通知について」

4月5日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を滝澤芳一と長野市長との間で締結する。

4月6日～4月20日 発掘調査の実施（実質11日間）。

4月20日付5埋第14号（滝澤芳一・県教育長あて、市教育長名）

「発掘調査終了届（通知）」

4月20日付5埋第15号（長野中央警察署長あて、市教育長名）

「埋蔵文化財の拾得について（届）」

5月27日付5教文第5-33号（市教育長あて、県教育長名）

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」

平成6年3月16日付5埋第316号（滝澤芳一あて、市長名）

「埋蔵文化財発掘調査業務委託の変更について（協議）」

平成6年3月16日付 「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」を滝澤芳一と長野市長との間で締結する。

平成6年3月17日付5埋第323号（滝澤芳一あて、市教育長名）

「発掘調査の終了について（報告）」・「委託料請求書」

第2節 調査日誌抄

平成5年

4月6日(火)快晴(調査員1名、作業員0名)

重機による表土剥ぎ作業を開始する。廃土置場の都合上反転掘りとし、A区(調査区西側)より掘削を開始した。

4月7日(水)晴れ(調査員3名、作業員8名)

午後から作業員による遺構検出作業。A区は調査範囲のほとんどが河川跡となり、湧水に悩まされながらの調査となった。

4月8日(木)雨天 現場作業中止

4月9日(金)快晴(調査員3名、作業員7名)

A区側溝トレンチおよび河川跡掘下げ。河川跡底面直上より一括土器片出土。河川跡精査および全体写真撮影。

4月12日(月)雨天 現場作業中止

4月13日(火)晴れ(調査員3名、作業員9名)

A区コーディックシステムによる遺構測量を実施する。
A区河川跡トレンチ掘下げ。

4月14日(水)晴れ(調査員3名、作業員0名)

A区遺構図結線。B区重機による表土剥ぎ作業。

4月15日(木)晴れ(調査員3名、作業員9名)

B区作業員による遺構検出作業。SA1等掘下げ。

4月16日(金)快晴(調査員3名、作業員8名)

B区住居跡精査および全体写真撮影。

4月19日(月)晴れ(調査員1名、作業員0名)

B区コーディックシステムによる遺構測量を実施する。
北側調査区壁の土層断面図を実測する。

4月20日(火)晴れ(調査員1名、作業員0名)

B区遺構図結線。三輪小学校児童および旭幼稚園園児が現地見学に訪れる。器材撤収作業。

本日をもって現場におけるすべての作業を終了する。

調査期間 平成5年4月6日～4月20日

実質調査日数 11日間

延作業員数 41人

起因事業面積 1,100 m²

保護対象面積 320 m²

実質調査面積 280 m²



写真1 A区重機表土剥ぎ作業



写真2 A区河川跡検出作業



写真3 A区河川跡掘下げ



写真4 B区土層断面実測

第3節 調査体制

本調査は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝沢忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	荒井和雄
		所長補佐	山中武徳
		所長補佐	矢口忠良

庶務係

係長 山中 武徳

事務員 青木 厚子

調査係

係長 矢口 忠良（総括担当）

主査 青木 和明

主事 千野 浩

主事 飯島 哲也（調査主任）

専門主事 羽場 卓雄

専門主事 太田 重成

専門主事 清水 武

専門員 中殿 章子（遺物実測）

専門員 横山かよ子（調査員）

専門員 笠井 敦子

専門員 山田美弥子

専門員 寺島 孝典

専門員 西沢 真弓（調査員）

調査員 矢口 栄子、青木 善子

発掘参加者 金子徳太郎、金子弥平、小林こまよ、小林三郎、小松未喜子、小松安和、斉藤孝作、
桜井修白、水島利男、宮原孝子、脇坂智子

整理参加者 池田見紀、岡沢治子、田中由美子、徳成奈於子、西尾千枝、向山純子

遺構測量委託 有限会社写真測図研究所 代表取締役 杉本 幸治（〒380 長野市鶴賀678）

協力者 滝澤建設株式会社・上野昭一、内山 威



写真5 発掘調査参加者

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査区の位置と地形

開発予定地は駐車場として利用されていた地点であるが、近年までは水田耕作地であった。過去の調査地点の中では下位に位置する。旧字名は「三諸前（ミムロマエ）」であり、延喜式神名帳に記載された水内9社の筆頭式内社である美和神社の南側に位置することから「神のおわすところの前」という意味も考えられる。地形的には古くから集落が展開していたことを予想させる、南側に向かってなだらかに傾斜する適地である。調査区東側には南北方向に水路が走り、また扇状地の扇端部に近い地形から水利用も容易だったと思われるが調査時には湧水に苦慮した。なお湧水位は371m付近であった。

第2節 発掘調査歴

三輪遺跡周辺は浅川扇状地遺跡群の中央部付近に位置しており、良好な埋蔵文化財の包蔵地域である。三輪遺跡の発掘調査はこれまでに4地点が実施されている。これまでの発掘調査成果から、三輪遺跡周辺の考古学的環境を概観する。

1 三輪遺跡（三輪小学校地点）

昭和50・51・53年度の3次にわたって合計約2200㎡の発掘調査が実施されており、1次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、時期不明の溝跡が1条確認されている。2次調査では古墳時代中期・平安時代の竪穴住居跡7軒・溝跡2条が検出され、古墳時代中期の竪穴住居跡からは6世紀初頭の須恵器杯が出土している。3次調査では弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居跡7軒・土坑2基が検出されている。

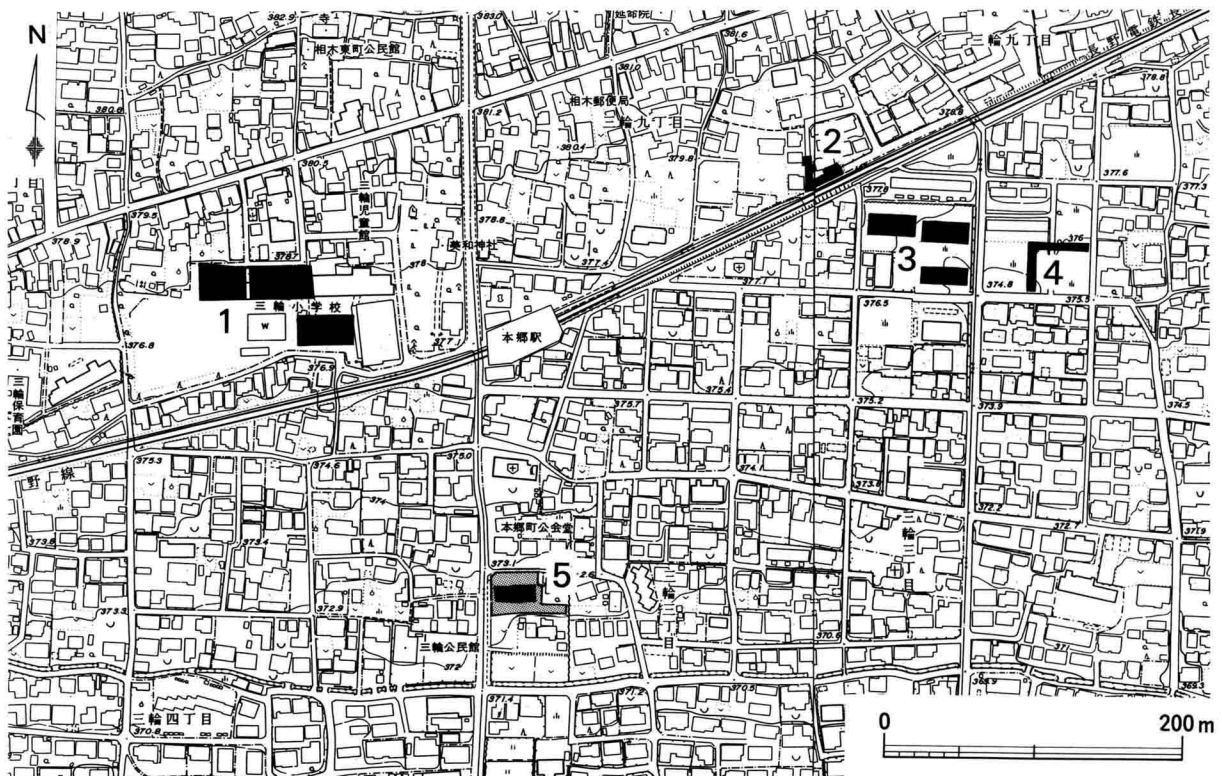


図2 三輪遺跡調査地点位置図（S = 1 : 5,000）
（番号は各調査次数を示す）

2 三輪遺跡（長野電鉄本郷住宅地地点）

昭和61年度に本郷住宅地造成事業に伴い調査された。発掘調査は道路部分の約450㎡について実施し、古墳時代後期から平安時代に至る竪穴住居跡5軒・溝跡4条・土坑1基を検出した。

3 三輪遺跡（国鉄清算事業団本郷団地地点）

平成2年度に約300㎡の発掘調査がされている。調査では弥生時代後期の竪穴住居跡2軒、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒・土坑1基、奈良～平安時代の竪穴住居跡3軒、中世の土坑5基がそれぞれ確認されている。

4 三輪遺跡（長野県職員宿舎建設地点）

平成4年度、本郷団地地点の道路をはさんだ西側で約900㎡について発掘調査を実施した。平安時代の竪穴住居跡2軒・溝跡7条・土坑4基・竪穴状遺構2基・柱穴列（掘立柱建物跡）1条などが検出されている。また中世以降のものと思われる五輪塔を埋納した施設や溝跡3本も確認されている。

なお、今次調査地の南には三輪遺跡との関連性が指摘される旭幼稚園遺跡が存在する。旭幼稚園建設中に市民によって発見された遺跡で、昭和42年7月に調査を実施している。調査開始時には既に遺跡のほとんどが破壊されており、建設現場西南隅の一部を調査したにすぎない。調査では弥生時代中期後半の竪穴住居跡と思われる落ち込み（掘り込み）が確認され、一部に床面らしきものを検出している。

この他付近では、昭和43年に工事中に発見され長野吉田高校地歴班によって調査された下宇木B遺跡、昭和58年に調査された美和公園遺跡、平成2年に調査された下宇木遺跡がある。また相ノ木城跡、押鐘城跡、桐原要害跡などの中世城館跡も知られている。

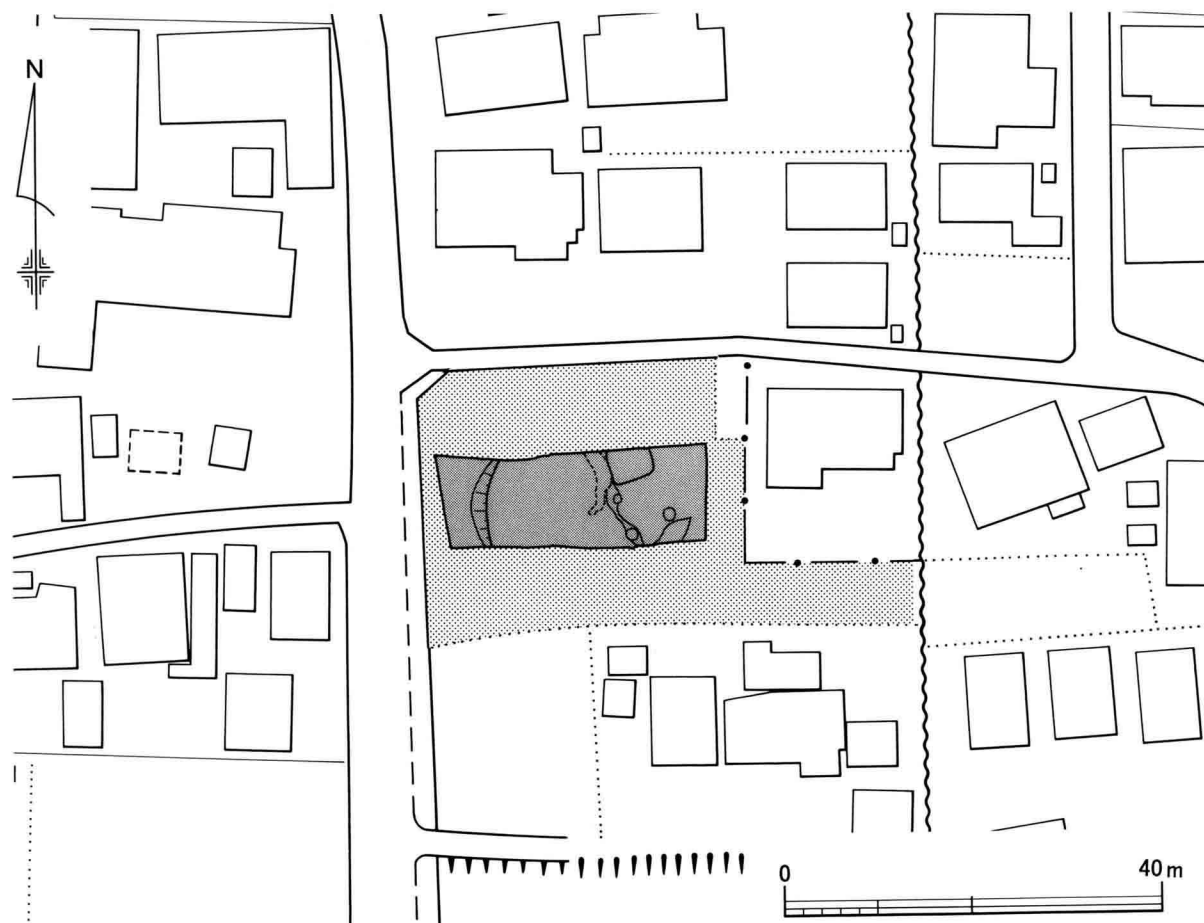


図3 調査区位置図（S = 1 : 800）

第3節 基本層序

廃土置場の都合上、調査区を東西に二分し、西側（A区）から調査を開始した。当初試掘時の成果より遺構検出面を地表下約140cmに設定したが、土層堆積状況が明らかに異なり、遺物包含層である黒色土層（第V層）および淡黒褐色土層（漸移層、第VI層）が西側に向かって落ち込んでいた。したがってA区のほとんどがSD1となる。基本的な土層序は調査区東側（B区）において6層に分層されるが、A区のSD1部分では砂礫層の間層を挟み込んでいる。なおB区のSA1の西側において礫層面の一部を検出したが、この層は第VI層の下層に潜り込んでおり、その存在理由は特定できなかった。

第4節 遺構と遺物

今次調査で検出した遺構は堅穴住居跡1軒（SA1）、河川跡1条（SD1）、溝跡1条（SD2）、土坑2基（SK1・2）、井戸跡（SE1）、性格不明遺構1基（SX1）である。SE1（井戸跡）は、近世以降の所産と考えられ、またSX1（性格不明遺構）は単なる包含層の落ち込みである可能性が高い。SD2（溝跡）は人工的に開削した溝というよりは自然流路であろう。調査区からの遺物の出土量はきわめて僅少で、摩滅した土器片がほとんどである。SA1とSD1以外は小破片が数片のみといった状況で、図化できる遺物は出土しなかった。

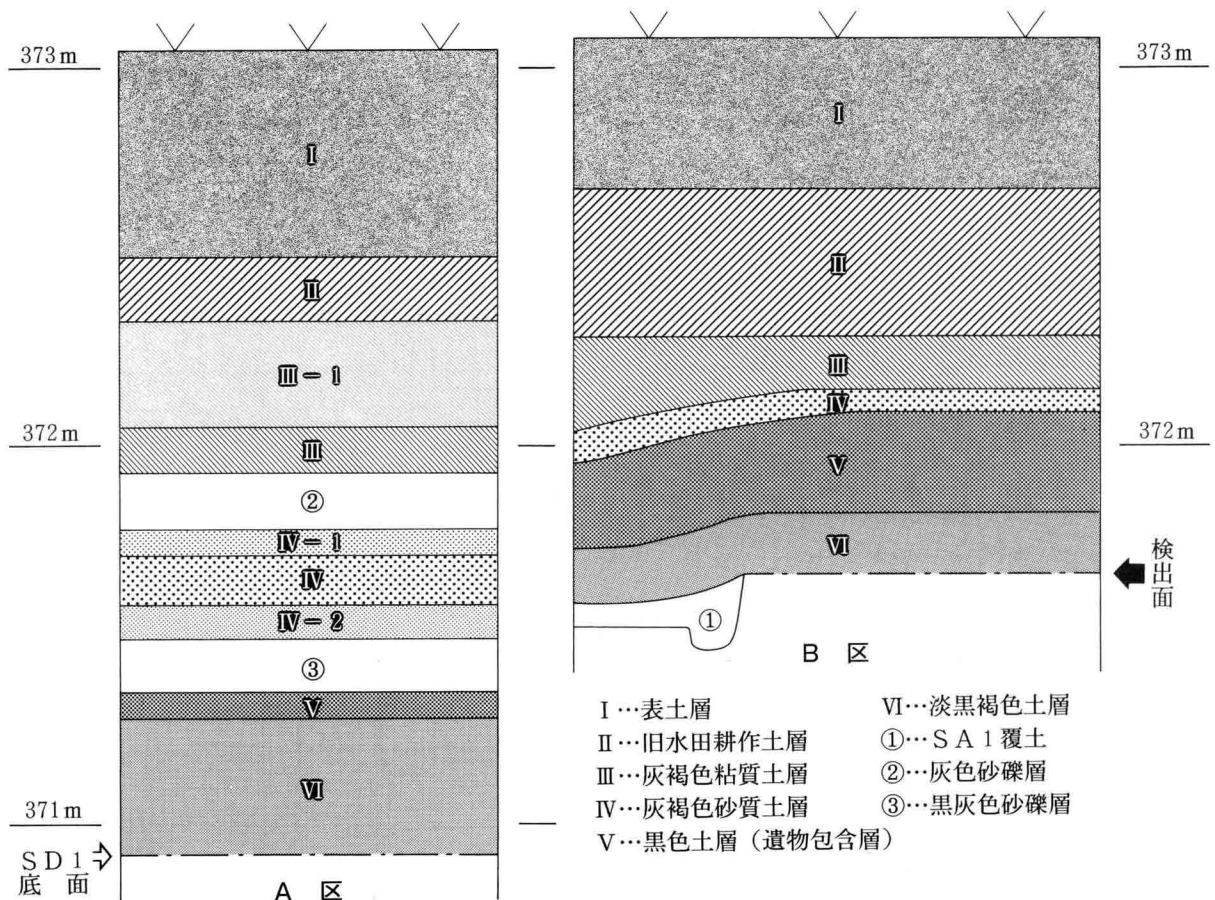


図4 土層柱状模式図（S=1:20）

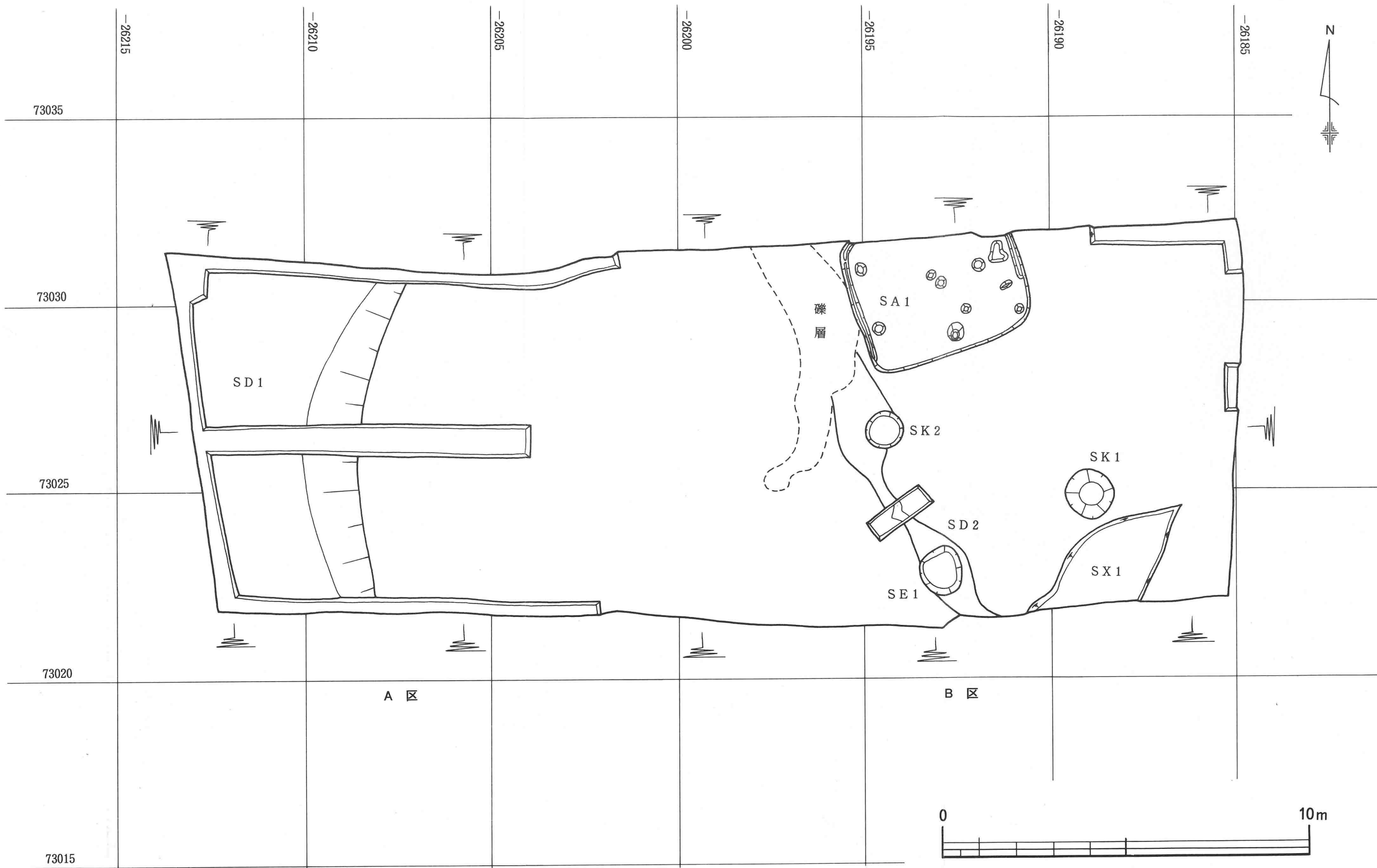


图5 三輪遺跡(5)全測図 (S = 1 : 100)

(1) 竪穴住居跡

SA 1

今次調査において唯一の住居跡である。一部が調査区外となるものの主軸4.68m、短軸およそ3.84m、主軸方位はN71° E、検出面からの床面の深さは16cmを測る、隅丸長方形を呈する住居である。東西辺には住居内壁溝が巡っているが、南壁際では確認できなかった。住居内中央に2基の炉跡を検出したが、被熱痕は明瞭ではなく焼土塊の量も少ない。きわめて短時間使用の痕跡と思われる。住居内では炉跡を含め小穴を10個検出しているが、総じて掘り込みは浅く柱穴らしい穴はP 1のみであった。

遺物の出土量は少なく、凶化し得た遺物は3点のみである。1は赤色塗彩を施した高杯の基部である。2は口縁部を欠損した甕体部で、土圧により崩壊した出土状況であった。3は土器片を転用した円盤状有孔土製品である。

これら出土遺物から弥生時代後期末葉の住居跡と考えられる。

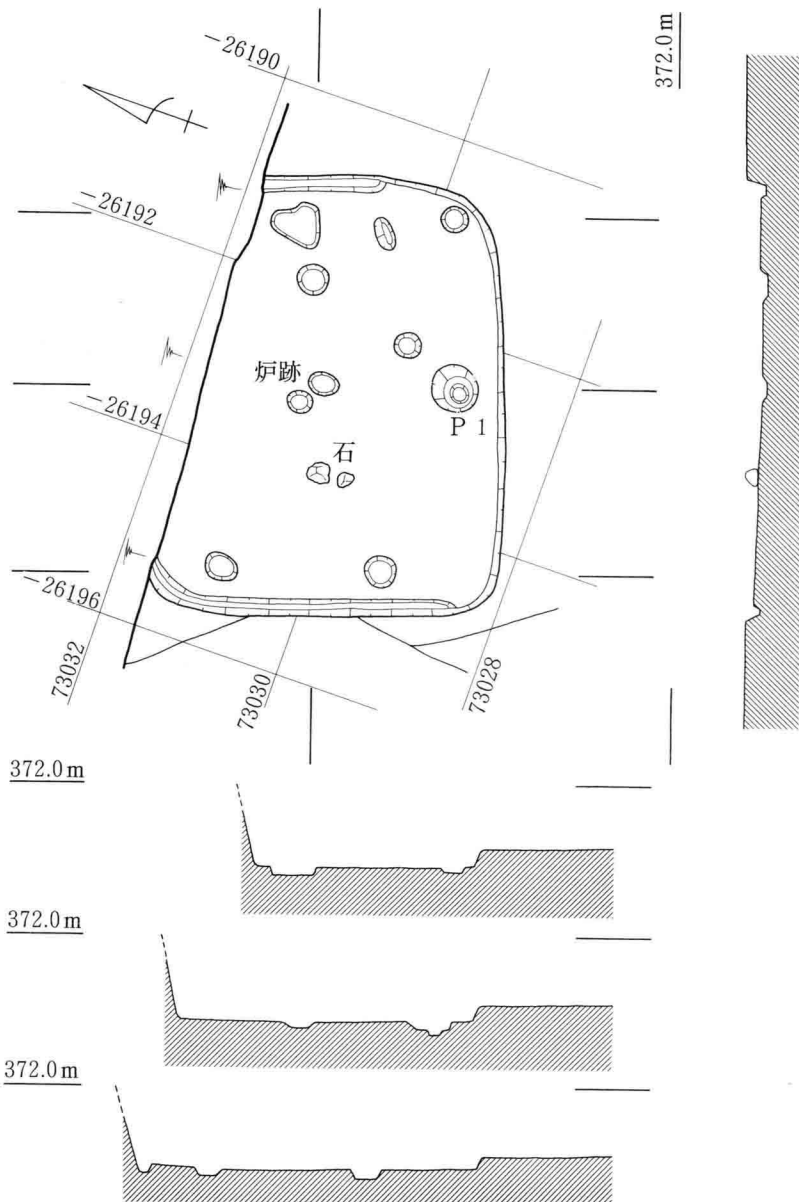


図6 SA 1実測図 (S = 1 : 80)

写真6 SA 1全景
(東から)



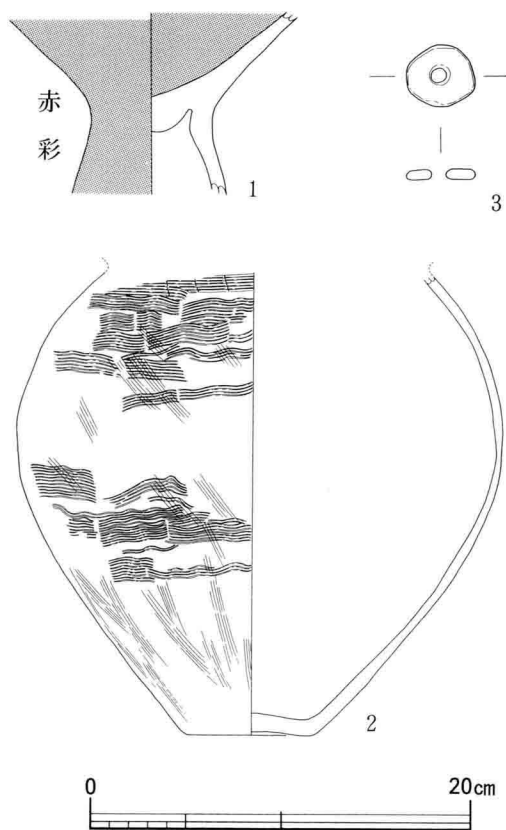


図7 SA1 出土遺物実測図
(S=1:4 3のみS=1:3)



写真7 SA1 全景 (南から)



写真8 SA1 土器(2)出土状況

(2) 河川跡

SD1

A区にて検出したSD1は河川跡（あるいは大溝跡）と考えられる遺構である。地形図からは読み取れないものの西側に向かって落ち込む状況から考えて、現在の道路部分が遺構の伸延に当たるものと思われる。落ち込みの傾斜はなだらかであり、最深部で現地地表下約2m、予想される幅は6～7mであろうか。したがって美和神社の東脇から今次調査区の西側を走る河川（あるいは自然流路を利用した大規模な溝）を想定できよう。遺物出土量は僅少であるが、底面付近より赤色塗彩が肩部に残存する壺（1）や、器壁の厚い短頸直口の壺（2）が出土している。出土遺物から弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の河川（大溝）と考えられる。

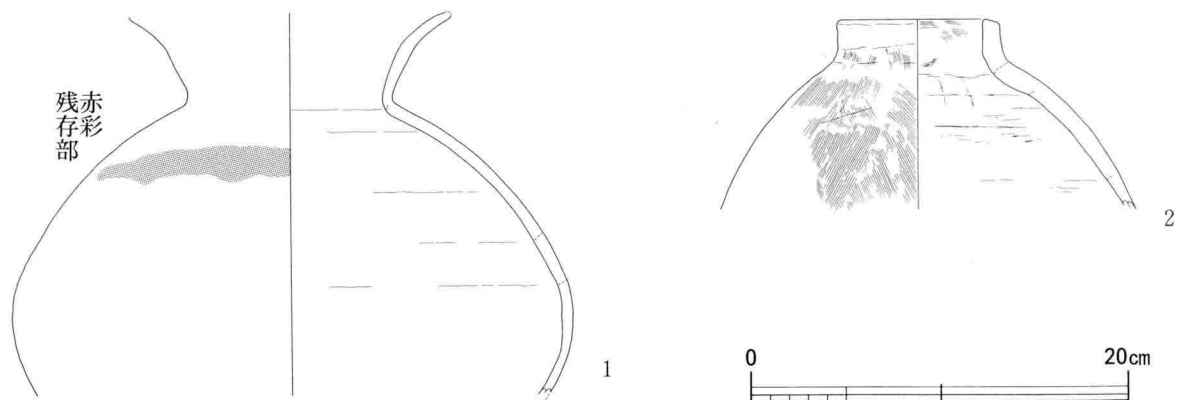


図8 SD1 出土遺物実測図 (S=1:4)

第Ⅲ章 小 結

調査において検出したSD1は、美和神社の東脇から今次調査区の西側を走る河川、あるいは人工的な掘削の痕跡は認められないものの、自然流路を利用した大規模な溝を想定できる遺構である。したがって弥生時代後期の集落は調査区の北・東側に展開するものと思われる。また検出面出土遺物中には、平安時代の須恵器片も散見できることから該期の集落の展開も付近に想定できる。調査地から東側、過去の第2～4次調査地に至るまでに幾筋もの沢筋を地形図から読み取ることができ、さらに第1次調査地点とも河川（大溝）跡を挟むことが予想されることから、扇状地上の集落として、幾筋もの小規模な沢筋に分断・区画された集落立地を想定できよう。

三輪遺跡の過去の成果においては、比較的古墳時代中後期と平安時代の遺構が主体を為すようである。弥生時代後期の遺構は、三輪小学校地点のSB13・16、国鉄清算事業団本郷団地地点でのSB4・6に限定される。今次調査成果とあわせても竪穴住居跡5軒・河川跡1条である。また弥生時代中期後半の旭幼稚園遺跡との時期的な問題もあわせ、三輪遺跡周辺の弥生時代に関して今後調査事例の蓄積により明らかとなろう。

それにしても最終日に現場見学を訪れた三輪小学校児童・旭幼稚園園児の素朴な質問には返答に窮してしまった。「テレビはないの?」「電話はないの?」といった質問に混じって、「どうして昔の人は土の中に住んでいたの?」「どんな人が住んでいたの?」には、わかりやすく答えることができたかどうか不安である。現場見学を通して過去・現在・未来という「時間」の感覚をイメージしてもらえたら、発掘調査を実施した意味も多少なりとも増すだろう。



写真9 B区全景（西から）



写真10 A区全景（南から）



写真11 A区全景（西から）

小島柳原遺跡群

KAMI NAKA JIMA SITE

上 中 島 遺 跡

東邦北長池団地造成工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3

長野市教育委員会

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経過

上中島遺跡の所在する長野市朝陽一帯は閑静な郊外型住宅地域である。国道18号線沿線には郊外型大型店が軒を連ねるものの、一步横道に入ると住宅地、さらには豊かな田園地帯となる。最近では住宅が田畑を侵食し、居住域の拡大が図られている。こうした中、都市計画法第32条の規定に基づく開発行為にともなう事前協議申出書が事業者である東邦商事株式会社（代表取締役 増子司平）から提出された。当該地籍においては周知の埋蔵文化財包蔵地である小島柳原遺跡群の範囲内に属していることから、埋蔵文化財保護措置の必要性を判断し、事業者との保護協議を実施した。以下書類に記された日付に従い事務経過を列挙する。

- 平成5年2月15日受付（埋文センターあて、建築指導課より合議）
「開発行為にともなう事前協議申出書」
2月17日付4埋第235号（建築指導課長あて、埋文センター所長名）
「開発行為に関する事前協議について（回答）」
3月5日付（市教育長あて、東邦商事株式会社 代表取締役 増子司平名）
「開発行為にともなう埋蔵文化財確認調査の依頼について」
3月15日 埋蔵文化財確認調査の実施。
3月18日付4埋第257号（増子司平・建築指導課長あて、埋文センター所長名）
「東邦北長池団地造成工事に伴う埋蔵文化財確認調査について（報告）」
3月22日付（文化庁長官あて、増子司平名）
「埋蔵文化財発掘の届出について」
3月31日付4埋第277号（県教育長あて、埋文センター所長名）
「埋蔵文化財発掘の届出について（進達）」
3月31日付（市教育長あて、東邦商事株式会社 代表取締役 増子司平名）
「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」
4月5日付5埋第2号（増子司平あて、市教育長名）
「開発行為にともなう埋蔵文化財発掘調査について（回答）」
4月5日付5埋第2号（文化庁長官あて、市教育長名）
「埋蔵文化財発掘調査の通知について」
4月15日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を増子司平と長野市長との間で締結する。
4月30日～5月21日 発掘調査の実施（実質13日間）。
5月25日付5埋第55号（増子司平・県教育長あて、市教育長名）
「発掘調査終了届（通知）」
5月25日付5埋第56号（長野中央警察署長あて、市教育長名）
「埋蔵文化財の拾得について（届）」
7月7日付5教文第5-96号（市教育長あて、県教育長名）
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
平成6年3月16日付5埋第317号（増子司平あて、市長名）
「埋蔵文化財発掘調査業務委託の変更について（協議）」
平成6年3月16日付 「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」を増子司平と長野市長との間で締結する。
平成6年3月17日付5埋第324号（増子司平あて、市教育長名）
「発掘調査の終了について（報告）」・「委託料請求書」

第2節 調査日誌抄

平成5年

4月30日(金)小雨(調査員2名、作業員0名)

重機による表土剥ぎ作業を開始する。

5月6日(木)晴れ(調査員3名、作業員12名)

テント・バリケード等設置。作業員による調査区壁削りと遺構検出作業。攪乱(旧北八幡川流路跡)からの湧水が著しく、排水しながらの作業となった。

5月7日(金)晴れ(調査員3名、作業員13名)

遺構検出作業。側溝トレンチ・SD1・SA3掘下げ作業。作業風景写真撮影。

5月10日(月)雨天 現場作業中止

5月11日(火)晴れ(調査員3名、作業員12名)

降雨帯水による排水作業。SA1・2・3掘下げ作業。

5月12日(水)晴れ(調査員3名、作業員12名)

排水作業。SA1・2・3掘下げ作業。

5月13日(木)曇り(調査員3名、作業員12名)

SA1・2・3掘下げ作業。SA3より政和通宝出土。

5月17日(月)晴れ(調査員3名、作業員12名)

排水作業。SA1・3掘下げ作業。

5月18日(火)曇り(調査員3名、作業員11名)

SA1・2・3掘下げ作業。SA1ベルト除去作業。SA1個別写真撮影。

5月19日(水)晴れ(調査員3名、作業員8名)

SA1・2・3精査および完掘写真撮影。全体写真撮影

5月20日(木)曇り(調査員3名、作業員10名)

トレンチ1・2、SD2掘下げ作業。SM1掘下げ。コーディックシステム測量。

5月21日(金)晴れ(調査員3名、作業員12名)

平面図結線。SX1写真撮影。器材撤収作業。本日をもって現場におけるすべての作業を終了する。

調査期間	平成5年4月30日～5月21日(実質11日)
延作業員数	114人
起因事業面積	2,221㎡
保護対象面積	300㎡
実質調査面積	240㎡



写真12 重機による表土剥ぎ



写真13 検出作業開始



写真14 SA1掘り下げ



写真15 SA3掘り下げ

第3節 調査体制

本調査は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝沢 忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	荒井 和雄
		所長補佐	山中 武徳
		所長補佐	矢口 忠良

庶務係

係長	山中 武徳
事務員	青木 厚子

調査係

係長	矢口 忠良（総括担当者）	専門員	中殿 章子（遺物実測）
主査	青木 和明	専門員	横山かよ子（調査員）
主事	千野 浩	専門員	笠井 敦子
主事	飯島 哲也（調査主任）	専門員	山田美弥子
専門主事	羽場 卓雄	専門員	寺島 孝典
専門主事	太田 重成	専門員	西沢 真弓（調査員）
専門主事	清水 武		

調査員	矢口 栄子、青木 善子
発掘参加者	大川成司、大川和子、小林紀代美、小林こまよ、小林三郎、小松未喜子、小松安和、鈴木友江、徳永 一、待井春子、宮沢ツネ子、宮原孝子、脇坂智子
整理参加者	池田見紀、岡沢治子、勝田智紀、小泉ひろ美、田中由美子、徳成奈於子、武藤信子
遺構測量委託	有限会社写真測図研究所 代表取締役 杉本 幸治（〒380 長野市鶴賀678）
協力者	東邦商事株式会社・若林一巳・野口譲三、北信土建株式会社・野沢 敏



写真16 発掘調査参加者

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査区の位置と地形

飯綱山を水源とする浅川は、長野盆地に流入すると浅川東条地籍を扇頂とし、金箱・富竹・北堀・南堀・石渡・東和田等を扇端とする典型的な扇状地を形成する。これより東南は近世初頭に改修された裾花川や、犀川そして千曲川によって形成された沖積地となる。本遺跡の所在する長野市北長池地籍は、これら河川の氾濫によって形成された島状の微高地が散在している地域である。この微高地上に小島柳原遺跡群の各遺跡が分布している。

第2節 発掘調査歴

本遺跡の近隣で、過去に調査された微高地上の遺跡は小島境遺跡と南川向遺跡である。前述のとおり島状に散在する微高地上の遺跡であることから、これらの各遺跡が一連の集落を形成する可能性も考えられるが、現状では未だ資料不足であろう。各遺跡の調査成果を概述し、周辺の考古学的環境とする。

1 小島境遺跡

昭和57・58年に特殊宅地造成事業（富士通長野工場新築）にともない緊急発掘調査された遺跡である。弥生時

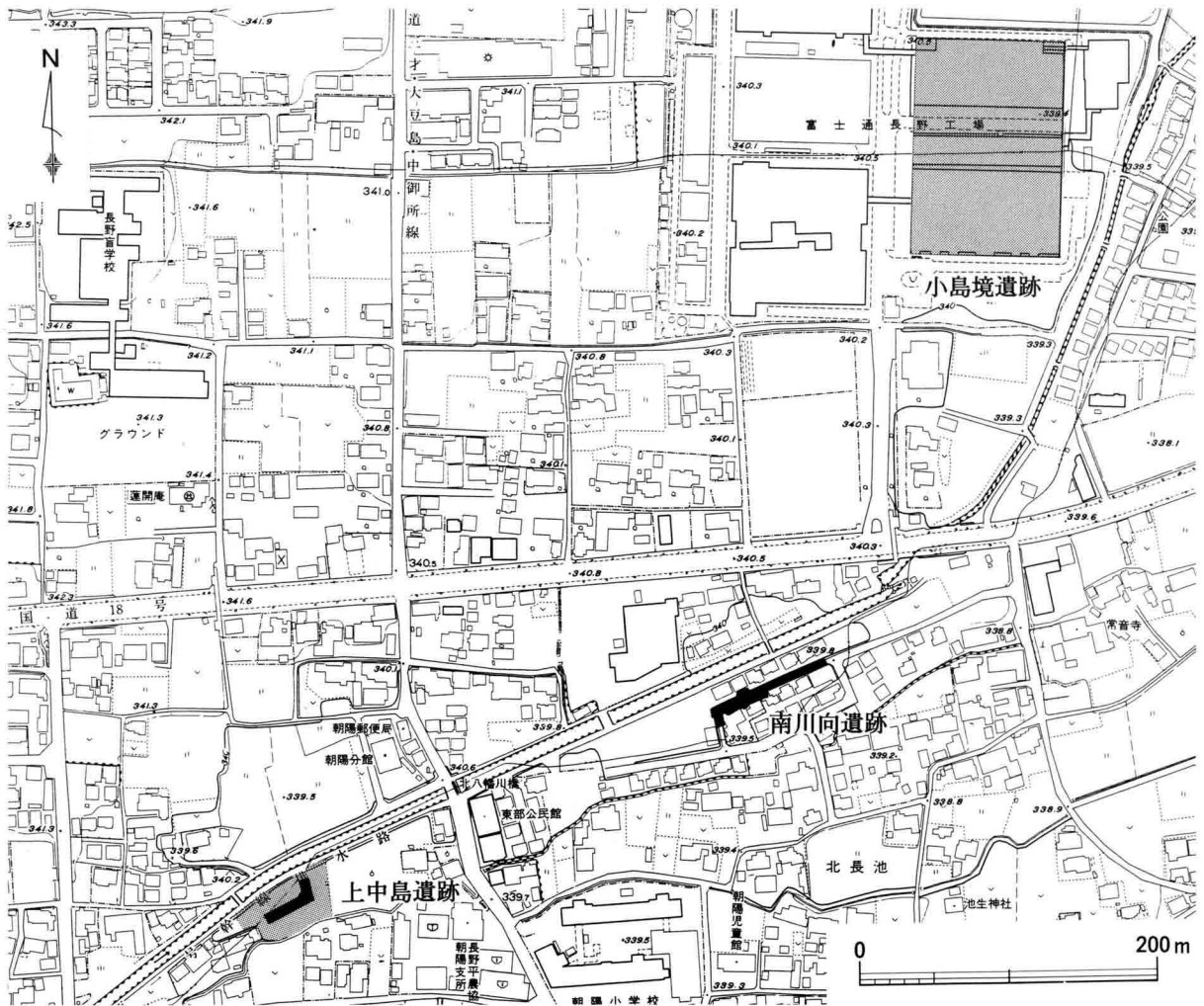


図9 上中島遺跡調査地点位置図 (S = 1 : 5,000)

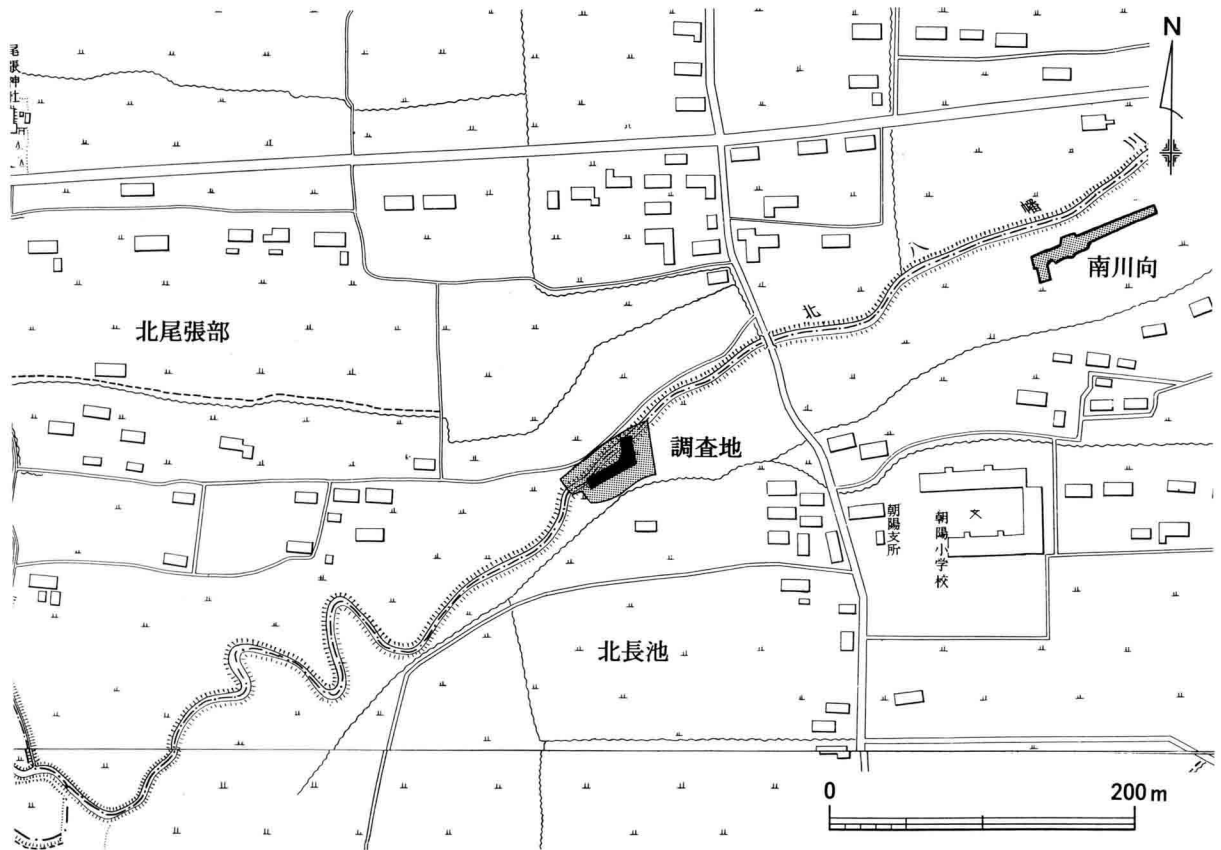


図10 調査地周辺地形図 (S = 1 : 5,000)

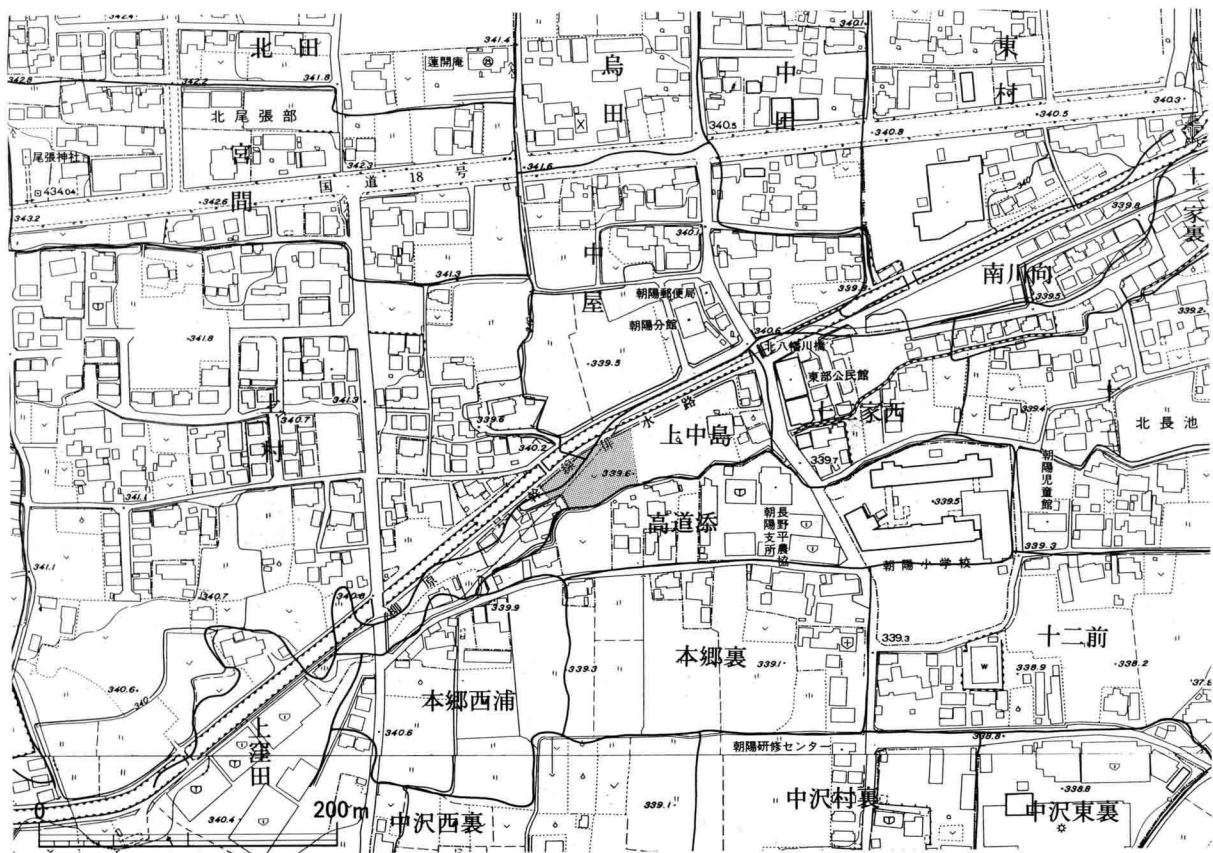


図11 調査地周辺字図 (S = 1 : 5,000)

代中期から近世にかけての複合遺跡で、検出された遺構は弥生時代中期竪穴住居跡1軒、弥生時代後期竪穴住居跡1軒、古墳時代前期竪穴住居跡数軒・方形周溝墓5基、古墳時代中期土坑2基のほか、近世水田水路・溝・柱穴群がある。このうち古墳時代前期の住居跡3軒から、原石材（緑色凝灰岩・鉄石英）・未製品・砥石・剥片・破片等の玉造り関連遺物が出土し、玉造りの工房跡である可能性が指摘されている。調査者は剥片・破片が少量であったことなどから、限られた原材料による小規模玉生産を想定している。

2 南川向遺跡

昭和61年に民間宅地造成開発事業にともなう緊急発掘調査として実施された。古墳時代前期から中世にいたる複合遺跡で、古墳時代前期の遺構としては土坑1基、時期不明を含め平安時代後期の遺構は竪穴住居跡6軒・土坑13基・溝跡5条、中世と思われる特殊遺構1基である。平安時代後期2号住居址からの緑釉陶器皿の出土が特筆される。

第3節 遺構と遺物

本調査にて検出した遺構は、平安時代後期～中世にかけての竪穴住居跡3軒（SA1～3）、火葬骨埋葬墓1基（SM1）、溝跡2条（SD1・2）、小穴9個、性格不明遺構1基（SX1）、柳原1号幹線排水路改修前の北八幡川流路跡である。このうちSD2は旧北八幡川にともなう遺構（落ち込み）である可能性が高く、またSX1は単なる包含層の落ち込みであろう。

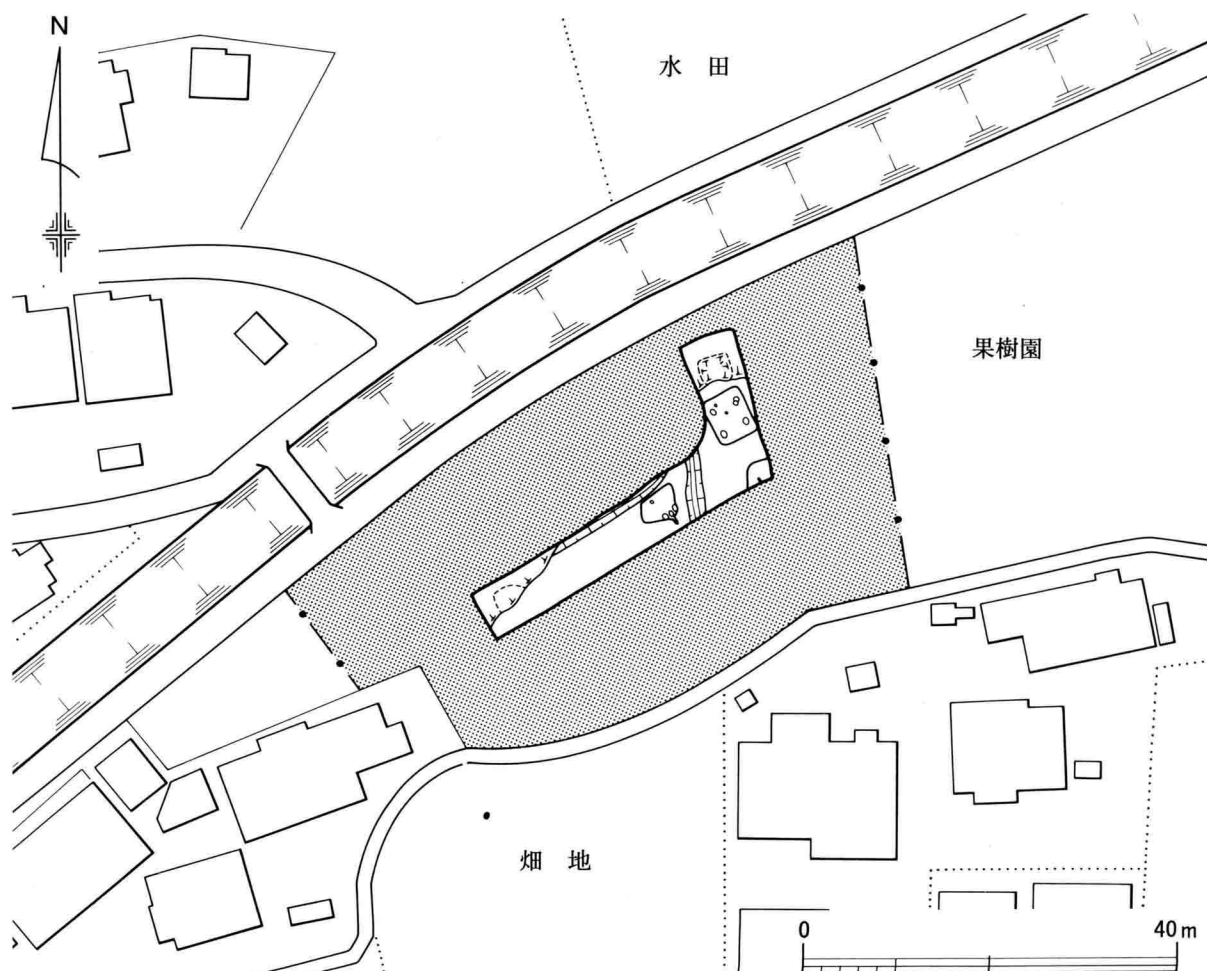


図12 調査区位置図（S = 1 : 800）

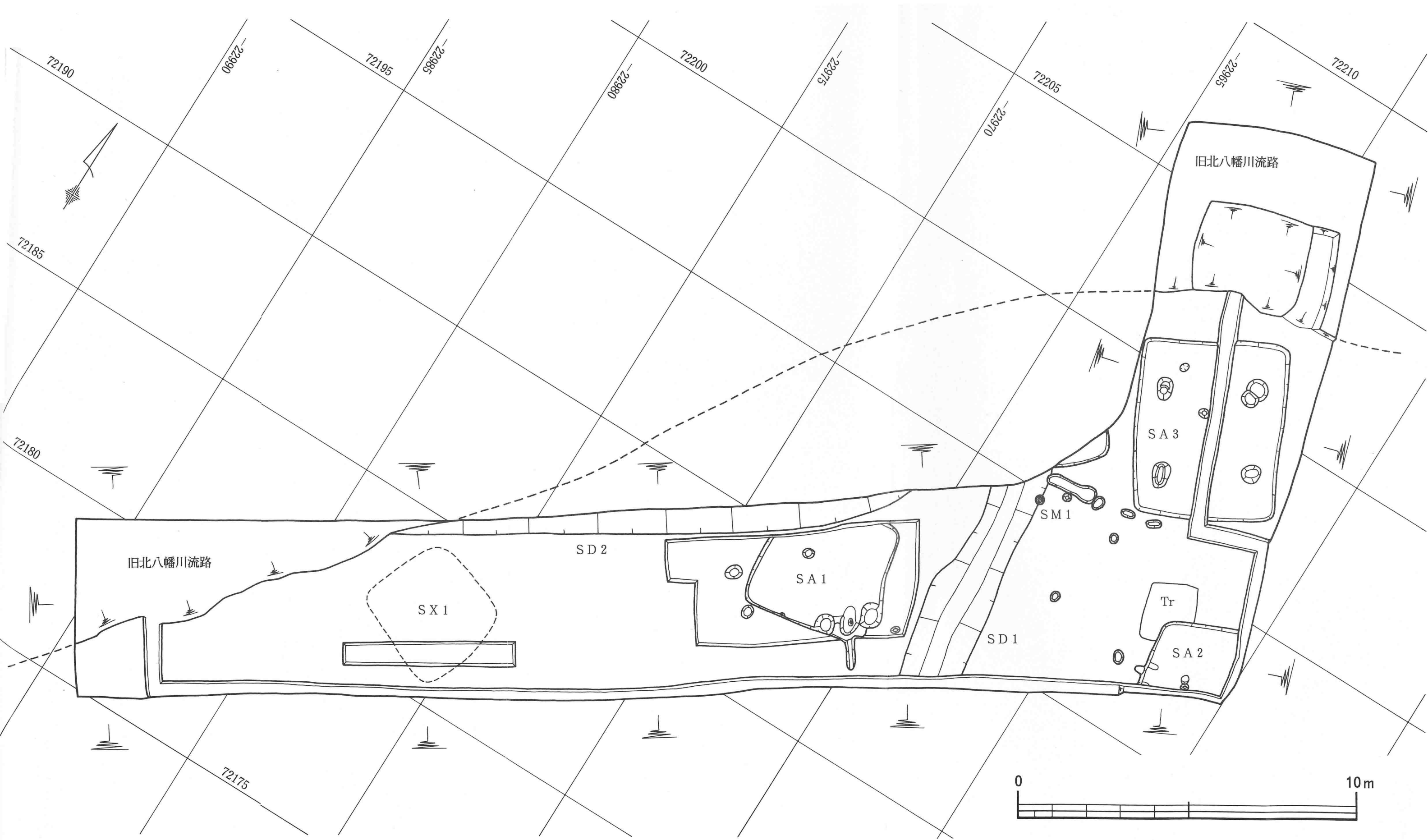


図13 上中島遺跡全測図 (S = 1 : 100)

(1) 竪穴住居跡

SA 1

一部調査区外となるものの、一辺約3.70mの正方形を呈する住居跡である。検出面からの床面の深さは30cmを測る。堅緻な床面は検出できなかった。カマドは住居の南東隅に構築され、著しい破壊を受けているが、両袖の痕跡や煙道などが残存していた。特に燃焼部では支脚石抜き取り痕と思われる小穴を検出している。またカマド両脇に土坑が穿たれており、出土遺物の多くがここから出土したことを考え合わせると、作業ピットである可能性が高い。

出土遺物には土師器杯4点（1～4、うち内黒処理1点）、内黒処理された高台付杯2点（5・6）、甕口縁部破片（7～9）、持ち砥石（10）がある。

カマドの設置位置、出土遺物から10世紀後半頃の住居と思われる。

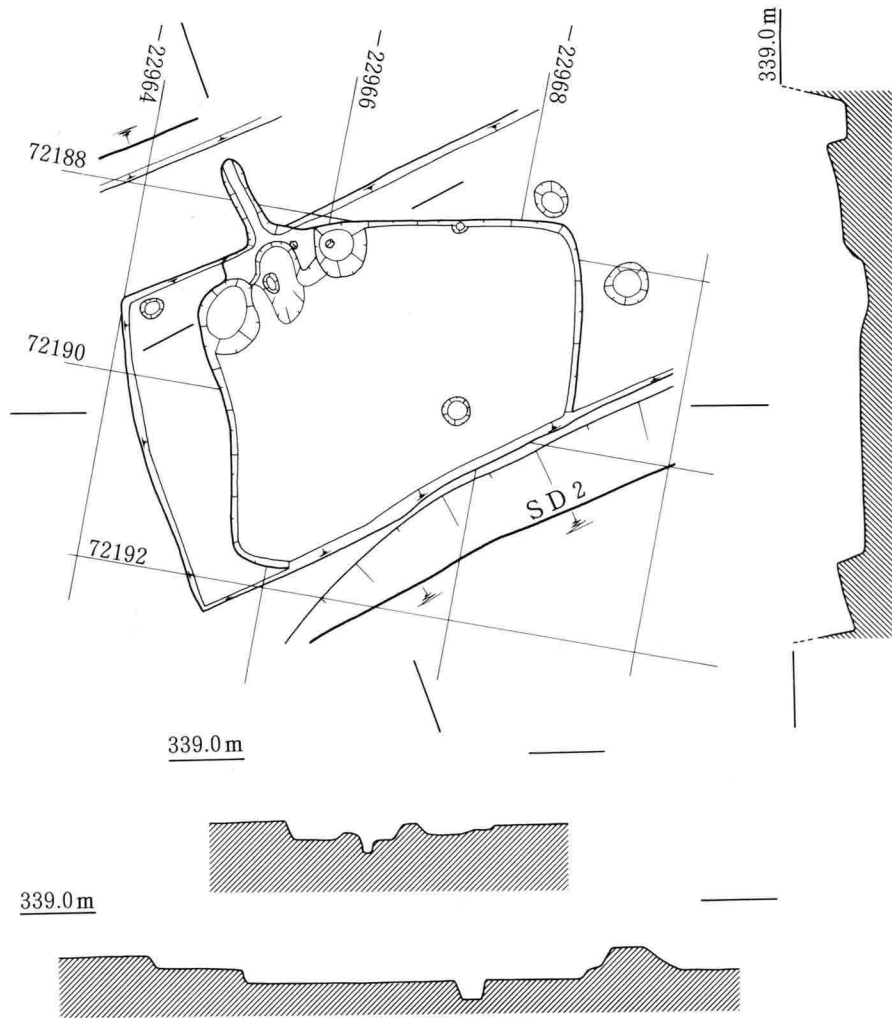


図14 SA 1実測図 (S=1:80)



写真17 SA 1全景

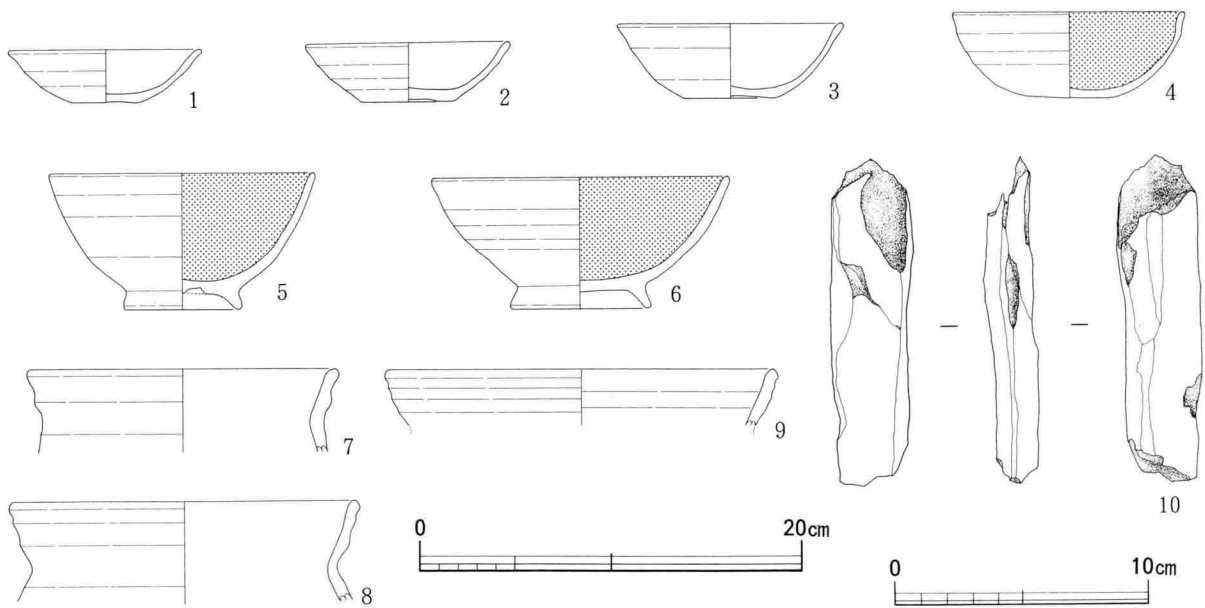


図15 SA 1 出土遺物実測図 (S = 1 : 4、10のみ S = 1 : 3)

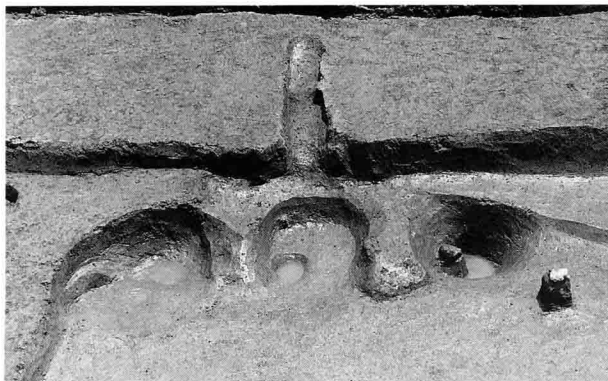


写真18 SA 1 カマド近景



1



2



5



4



3



10

写真19 SA 1 出土遺物写真

SA 2

調査区の南東隅において検出した遺構で、多くは調査区外となる住居跡である。全体の四分の一の検出にとどまり住居の規模は不明であるが、おそらく正方形を呈するものと思われる。試掘時に床面を確認しており、検出面からの床面の深さは28cmを測る。調査区内では堅緻な床面は確認できなかった。カマドは西壁のほぼ中央と思われる位置に構築され、両袖の痕跡、煙道、灰溜まりピット等が残存している。またカマド構



写真20 SA 2 全景

築材と思われる石材が散在し、破壊状況をうかがわせる。遺物の多くはカマド周辺より出土した。出土遺物は土師器杯3点（1～3）、小型甕（4）、甕破片（6～9）がある。また内耳土器（5）が混入しているものの、10世紀後半から11世紀代にかけての時間幅が考えられる。



写真21 SA2カマド近景

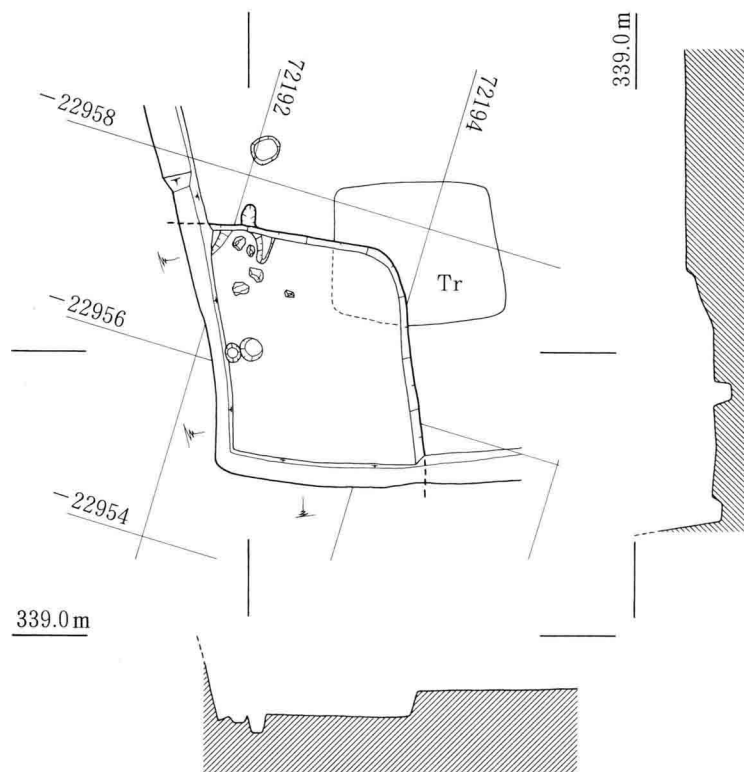


図16 SA2実測図 (S=1:80)

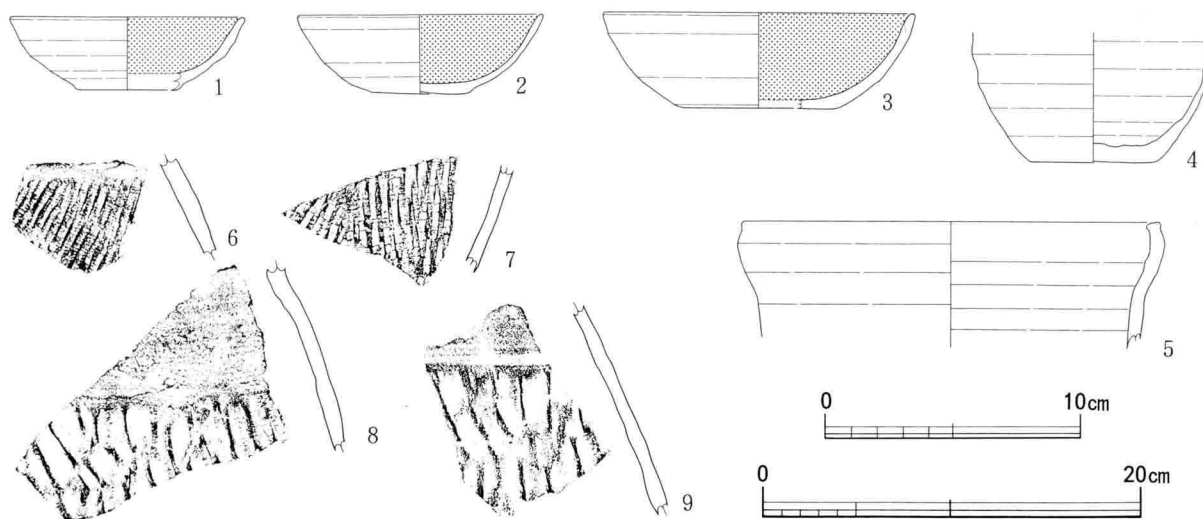


図17 SA2出土土器実測図 (S=1:4、6～9はS=1:3)

SA3

前述2軒の住居跡とは趣を異にする住居跡である。長軸5.18m、短軸4.27mを測る長方形を呈する住居跡で、軸方向はN28°Wである。検出面からの床面の深さは32cmで、堅緻な床面は確認できなかった。柱穴と思われるビットが4箇所方形配列される。床面および覆土中には石材が散在していたが焼土塊等のカマドの痕跡や炉跡等は検出できなかった。通常検出される古代の住居跡とは形態が異なっているため、住居とは別の用途を考慮すべき遺構あるいは中世の遺構と考えられる。出土遺物は小破片が多く、須恵器および土師器甕破片などが多い。図示した土師器杯（1）は胎土中に他の土師器片を含んでいる特異なもので、器壁も厚く作りは丁寧でない。また覆土中より1111年初鑄とされる北宋銭「政和通宝」（2）が出土している。

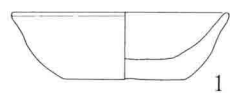


図18 SA3出土遺物実測図
(S=1:4、
2はS=1:2)

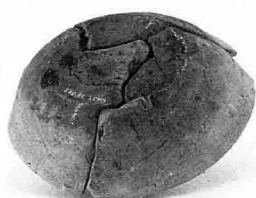


写真22 SA3出土遺物写真

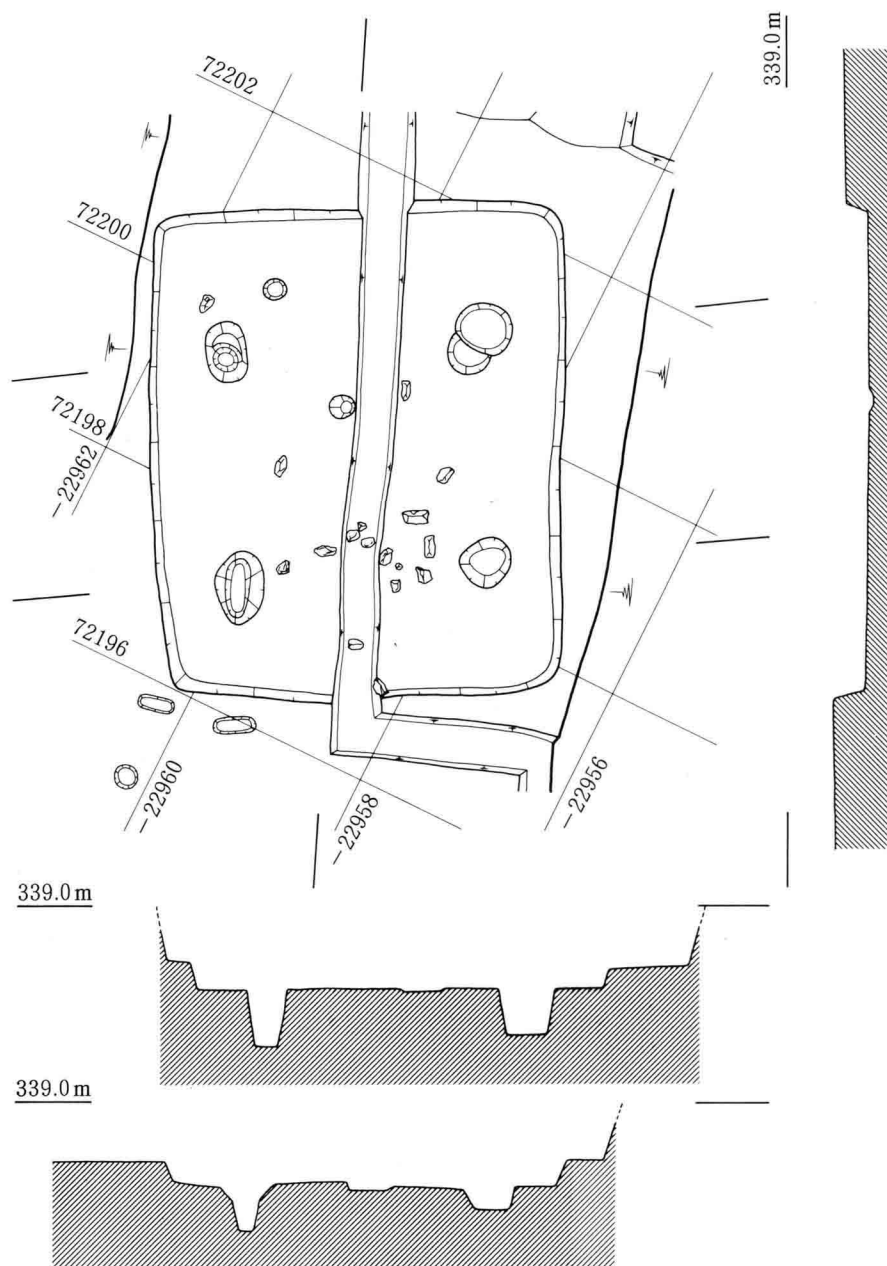


図19 SA3実測図 (S=1:80)

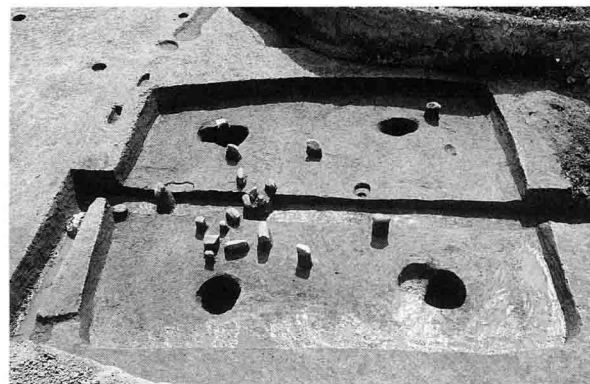


写真23 SA3全景

(2) 火葬骨埋葬墓

SM1

SD1の東側肩部にて検出した遺構で、細片化した炭化物と骨片が検出面に露出していた。直径約35cm前後の不正円形で、掘り込みは浅く検出面から5cm程度である。覆土は1層=茶褐色土+骨片、2層=炭化物+骨片、3層=茶褐色土である。これら堆積状況から曲輪状の容器に入れられた火葬骨埋葬墓と推定したが、積極的な根拠はない。出土遺物は皆無で、時期を特定できるものは出土しなかったものの、SA3とそう前後しない時期と推定される。

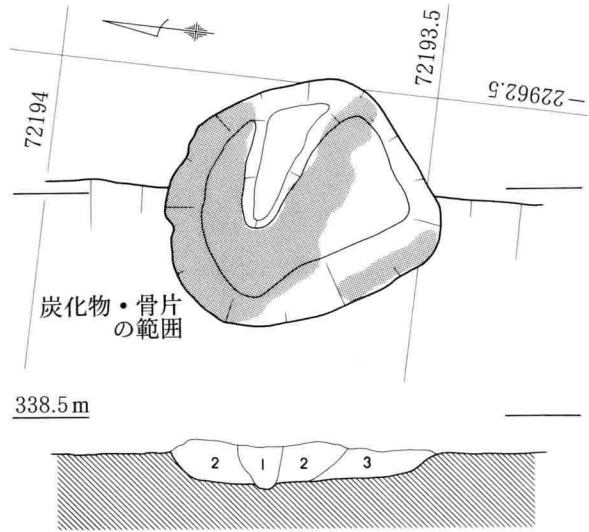


図20 SM1実測図(S = 1 : 10)



写真24 SM1検出状況

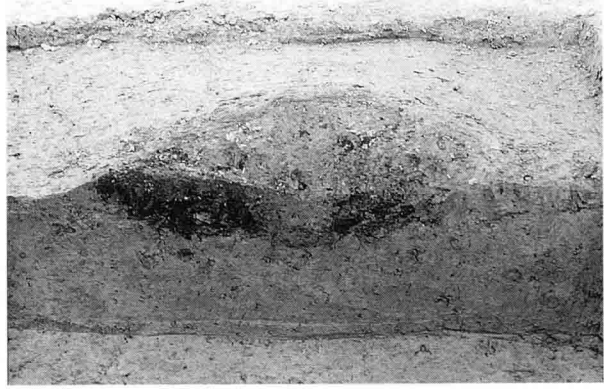


写真25 SM1半掘状況

(3) その他の遺構

この他SD1や小穴、包含層の落ち込みと考えられるSX1等が検出されているが、図示した検出面出土土器以外はいずれも小破片のみで図示できる遺物はなかった。検出面出土遺物には10世紀後半から11世紀代と考えられる土師器杯(1・2)と灰釉陶器(3・4)がある。また後世の所産と思われるが、木質部の残存する銅製のキセルが出土している。

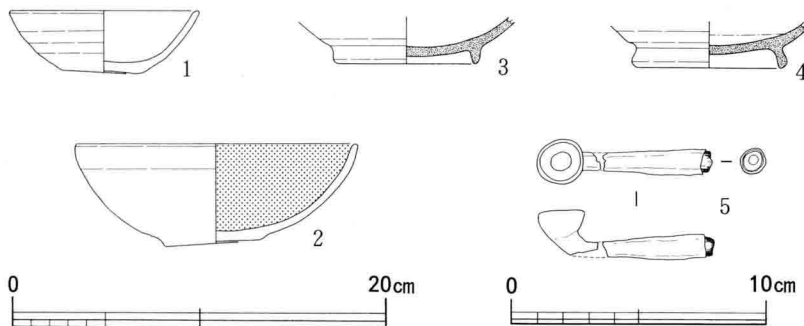


図21 検出面出土遺物実測図(S = 1 : 4 5のみS = 1 : 3)

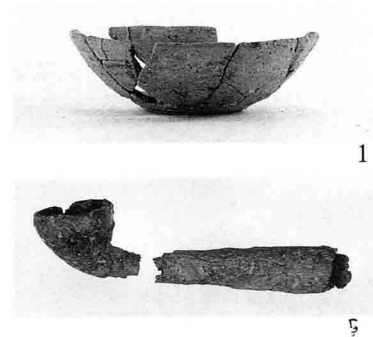


写真26 検出面出土遺物写真

第Ⅲ章 小 結

今回の調査を悩ませた要因の一つに、旧北八幡川流路からの湧水があげられる。21ページに掲載した昭和27年修正の地形図では、柳原1号幹線排水路改修以前の流路が調査区内に位置することがわかる。改修時に埋められた土砂に混じって生活廃棄物等が露出し、湧水のみならず異臭には本当に苦しめられた。

今回の調査では主に平安時代後期から中世にかけての遺構・遺物が確認され、該期の生活域の一端が明らかとなった。南川向遺跡において検出している該期の住居跡との関連において、比較的広範な一連の集落と考えられる。千曲川沖積地であることから水田等の生産域の推定には事欠かないため、肥沃な農村地帯をイメージさせる。急速に郊外型都市化したつい最近までの北長池・朝陽地区の様相の原景とみることができよう。

本遺跡の所在する小島柳原遺跡群は、弥生時代中期から中世にいたる複合遺跡である。今回の調査では平安時代から中世の遺構・遺物に限定されるものの、近接する南川向遺跡において古墳時代前期の土坑が検出されていることから、本遺跡周辺にも古墳時代前期あるいは弥生時代にまで遡る遺構の存在が予想される。また小島境遺跡において出土した玉造り関係遺物の存在から、古墳時代前期における当該地の特異性、通常の集落プラスアルファを予想させる地域である。千曲川自然堤防上の遺跡ゆえ、近接地に高塚系の古墳は存在しないが、方形あるいは前方後方形の周溝墓の存在は十分に考えられる。周辺の開発とともに今後急増するであろう調査事例を待って、本遺跡の評価を含め検討していく必要がある。



写真27 SA1～3 検出状況



写真28 全景（西から）



写真29 全景（東から）

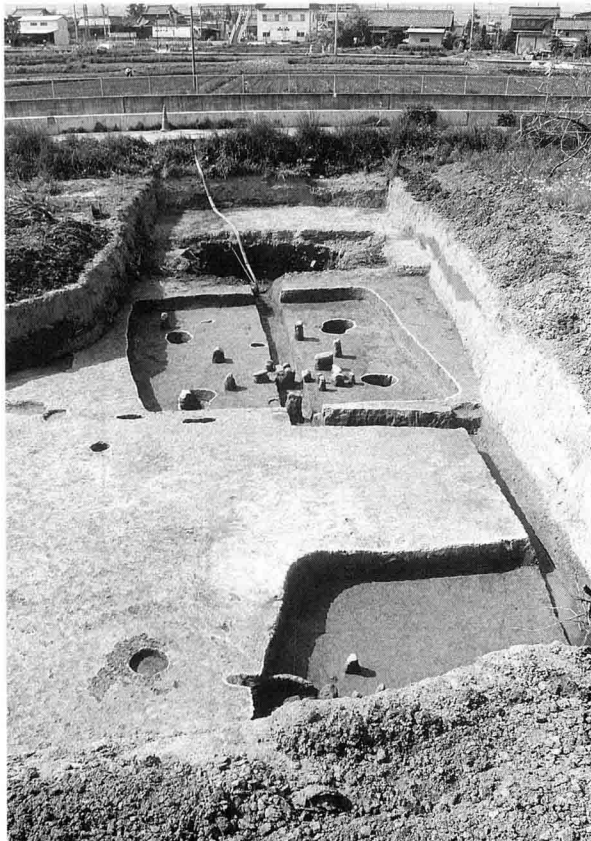


写真30 全景（南から）



写真31 全景（北から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん みわいせき ご ・ こじまやなぎはらいせきぐん かみなかじまいせき							
書名	浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡 (5) ・ 小島柳原遺跡群 上中島遺跡							
副書名	(仮称) 滝澤マンション建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書 東邦北長池団地造成工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	飯島哲也							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-22 長野県長野市小島田町1414番地 長野市立博物館内 TEL 0262-84-0004							
発行年月日	1994年3月31日							
印刷所	有限会社 長野プリントサービス (〒380 長野市南県町1048)							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みわいせきご 三輪遺跡(5)	ながのけんながのし 長野県長野市 みわ 三輪3丁目750- 1番地	20201	A-059	36° 39' 30"	138° 12' 30"	19930406 ~ 19930420	280	共同住宅 建設
かみなかじまいせき 上中島遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 おおあさきたながいけあざかみ 大字北長池字上 なかじま 中島1652番地		B-019	36° 39' 00"	138° 14' 30"	19930430 ~ 19930521	240	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
三輪遺跡(5)	集落跡	弥生時代 後期 ~ 古墳時代 初頭	堅穴住居跡	1軒	弥生土器 土師器 円板状有孔土製品			
			河川跡	1条				
			溝跡	1条				
			土坑	2基				
			井戸跡	1基				
			性格不明遺溝	1基				
上中島遺跡	集落跡	平安時代 ~ 中世	堅穴住居跡	3軒	土師器 灰釉陶器 砥石 錢貨(政和通宝) キセル			
			火葬骨埋葬墓	1基				
			溝跡	2条				
			土坑・小穴	12基				
			性格不明遺溝	1基				
			河川跡	1条				

長野市の埋蔵文化財

- 1968年 第1集『信濃長原古墳群』
1976年 第2集『浅川西条』
1978年 第3集『中村遺跡』
第4集『塩崎遺跡群』
1979年 第5集『塩崎遺跡群(2)』
1980年 第6集『三輪遺跡－付水内一元神社遺跡』
第7集『田中沖遺跡』
第8集『篠ノ井遺跡群』
第9集『四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(2)』
1981年 第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年 第12集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスA・E地点』
1983年 第13集『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里の遺構・石川条里の遺構』
1984年 第14集『石川条里の遺構(2)・上駒沢遺跡』
第15集『箱清水遺跡(2)』
1985年 第16集『石川条里の遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
1986年 第17集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスB・C・D地点』
第18集『塩崎遺跡群IV 市道松節－小田井神社地点遺跡』
1987年 第19集『土口将軍塚古墳－重要遺跡確認緊急調査－』
第20集『三輪遺跡(2)』
第21集『芹田小学校遺跡』
第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』
1988年 第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』
第24集『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
第25集『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』
第26集『東番場遺跡』
第27集『小柴見城跡』
第28集『宮崎遺跡』
第29集『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』
第30集『地附山古墳群』
第31集『町川田遺跡』
1989年 第32集『中条遺跡』
第33集『鶴前遺跡』
第34集『石川条里遺跡(4)』
第35集『篠ノ井遺跡群II』
1990年 第36集『屋地遺跡II』
第37集『篠ノ井遺跡群III』
1991年 第38集『栗田城跡・下字木遺跡・三輪遺跡(3)』
第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
第40集『松原遺跡』
第41集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡・檀田遺跡』
1992年 第42集『田中沖遺跡II』
第43集『南宮遺跡』
第44集『塩崎遺跡群(7)』
第45集『石川条里遺跡(6)』
第46集『篠ノ井遺跡群(4)』
第47集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』(2分冊)
第48集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡II』
1993年 第49集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』
第50集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』
第51集『松原遺跡II』
第52集『田牧居帰遺跡』
第53集『岩崎遺跡』
第54集『古町遺跡 流人塚』
第55集『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡II』
第56集『上見林遺跡』
第57集『石川条里遺跡(7)』
第58集『松原遺跡III』
第59集『史跡 松代藩主真田家墓所』
1994年 第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
第61集『栗田城跡(2)』

長野市の埋蔵文化財第62集

浅川扇状地遺跡群
三輪遺跡(5)
小島柳原遺跡群
上中島遺跡

平成6年3月25日 印刷
平成6年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 埋蔵文化財センター
印刷 (有)長野プリントサービス